大橋幸泰著『潜伏キリシタン――江戸時代の禁教政策と民衆――』

山中　聡

二〇一四年六月、「祈り」というテーマで、書評を書くことになった。しかし、近年に出た西洋史の学術書で、「祈り」を主題にしたものとなると、なかなか見つからない。どうしたものかと悩んでいたところ、ある日偶然、本書を見つけた。裏表紙には、江戸幕府に弾圧されたキリシタンが、その強靱な信仰心だけで、幕末まで潜伏し得たのかについて、再考する旨が記されている。キリシタンといえば「祈り」。興味を引かれて頁をめくれば、序章には魅力的な小見出しが並ぶ。「近世から近代への転換をどう見るか」・「宗教という語をどのように考えたらよいか」・「現代人の常識は過去の人びとの常識と同じか」。いずれの項目も、すべての歴史家にとって重要である。購入して一読すると、内容は深く、なおかつ現代世界にまで及ぶ射程を備えていた。本書は、既に各種メディアで高い評価を得ているという。大いに納得すると同時に、その書評に取り組むことで、評者自身、視野を広げたいと考えた。だが、本当に異分野の書籍を取り上げてよいのか、という戸惑いも感じずにはいられなかった。再び悩み始めた時、この書評を準備する過程で入手した他の書籍に、次の記述があったおかげで、「やはり書いてみよう」という気持ちになった。「自分で考えることにおいては、比較ということが大事になってくる。比較によって、異同が見えてくる。異なる場合は、何が、どのように違うのか、なぜ違いが生じたのか、逆に類似している場合は、なぜ類似することになったのか、微妙な違いは両者の思想・文化のいかなることに起因しているのかといったことに考察が発展することであろう。自分にとって、どのような意味を持つのかも問われよう[1]」。

また、今回は幸いにも、評者のわがままな申し出を、編集部が受け容れてくださった。評者の述べることが、前段で引用した文に見合う価値を持つかどうか、そして編集部のご厚意に応えられたかどうか、あまり自信はない。それでも、日本史と西洋史の双方にとって、わずかであっても有益な事柄が含まれていることを願いつつ、書評を進めていこう。本書の構成は以下のとおりである。

序　章　キリシタンを見る視座
第一章　「伴天連門徒」から「切支丹」へ
第二章　「異宗」「異法」「切支丹」
第三章　島原天草一揆と「切支丹」の記憶
第四章　異端的宗教活動から「切支丹」への転回
第五章　信仰共同体と生活共同体
第六章　重層する属性と秩序意識
終　章　宗教は解放されたか

では、章ごとに内容を紹介する。「第一章『伴天連門徒』から『切支丹』へ」では、近世日本にキリスト教が普及し、江戸幕府

によるキリシタン禁制が確立するまでの過程を描いている。本書によれば、幕府は一六一〇年代に禁教方針を明確にしたが、それはあくまで大方針であり、現実の運用には地域差が見られた。また当時は、狭義の宣教師と地域有力者などのキリシタン指導者、すなわち「伴天連」による地域支配が問題とされたため、その「伴天連」に指導される「門徒」のキリシタン民衆は、主たる取り締まりの対象でなかった。そうした傾向を変化させたのが、有名な島原天草一揆（一六三七年から一六三八年）である。実際には、この一揆にはキリシタンも、そうでない者も参加していた。いわば混成集団による事件である。一揆鎮圧を指揮した老中松平信綱自身、そのことは認識していた。だが幕府権力は、この一揆を「伴天連」に指導された土豪の仕業ではなく、キリシタン民衆が主体のものと見なした。それゆえ一揆鎮圧後は、民衆レヴェルでのキリシタン根絶が、重要な課題となった。これ以降、関係法令におけるキリシタンの呼称は「伴天連門徒」[2]ではなく、「切支丹」（既存秩序を乱す邪教徒）となった。並行して、いわゆる宗門改制度が成立する。周知のとおり、毎年人別に檀那寺が保証することで、人々がキリシタンではないと証明する制度である。宗門改自体は一六三〇年代から、諸地域で自発的に行われていたが、いくつかの地域で「崩れ」（潜伏キリシタン発覚事件）が起こって以降、一六五九年には五人組と檀那寺の確認、一六六四年には宗門改役の設置、一六七一年には宗旨人別帳の作成が指示された。キリシタン禁制は、もはや個々の藩による対処事項ではなく、幕府の指導で処理する国家的課題となった。

「第二章『異宗』『異法』『切支丹』」では、前述の宗門改が制度化したにもかかわらず、幕末まで潜伏キリシタンが存在できた理由を考察している。それには、異端的宗教活動に対する幕府の警戒が関係していた。評定所（幕府の最高裁判機関）の判例集『御仕置例類集』によると、こうした宗教活動は「異宗」・「異法」と呼ばれたが、あくまで既存秩序の許容範囲に収まるものとされた。つまり徹底的に排除すべき邪教「切支丹」とは、別物と見なされた。そして潜伏キリシタンは、こうした「異宗」・「異法」に含められた。実際、肥前国西彼杵郡浦上村山里では「崩れ」が四回起こったが（一七九〇年の「一番崩れ」、一八四二年の「二番崩れ」、一八五六年の「三番崩れ」、一八六七年の「四番崩れ」）、後述する幕末維新期の「四番崩れ」を除き、潜伏キリシタンが「異宗」や「異法」としては疑われても、「切支丹」として摘発されることは、なかったのである。

「第三章　島原天草一揆と『切支丹』の記憶」では、こうした「切支丹」と、潜伏キリシタンが区別された背景を詳解する。「切支丹」のイメージは、前述の島原天草一揆の記憶と密接に結びついた。社会を震撼させた一揆の記憶が、年紀法要などを通して継承される中、「切支丹」には、世を乱す邪教徒としてのイメージがまとわりついた。その結果、秩序を混乱させ得る宗教活動（浄土真宗の異端である「隠し念仏」等）は、みな「切支丹」と同様のものと見なされた。そして、このイメージが虚像となり、既存秩序を遵守する現実の潜伏キリシタンとの差異化を促した。結果、彼らの存続が可能になったのである。このように、「切支丹」のイメージは、実際の潜伏キリシタンとは乖離していったが、一方で近世人は、キリシタンに関して全くの無知でもなかった。

当時の通俗的排耶書（「切支丹」批判の書）は、大部分は荒唐無稽な内容であるものの、キリシタンが崇める創造主の概念や、彼らが行う施行・慈善活動についても述べており、当時の人びとに一定の知識を供給していた。

「第四章　異端的宗教活動から『切支丹』への転回」では、第三章で述べた「切支丹」イメージが肥大化した結果、キリシタンではないのに、「切支丹」そのものとして処罰される宗教活動が現れたことを紹介している。一八二七年の京坂「切支丹」事件である。この事件は、水野軍記なる人物が興し、その弟子豊田みつきが完成させた新興宗教を巡るものであった。同宗教は、キリシタンに特徴的な来世救済願望を持たず、加持祈禱や吉凶判断を中心とした民間信仰の類似物であったが、評定所の吟味で、「切支丹」と見なされた。とはいえ、この宗教の指導者の一部（豊田みつきの弟子であるきぬと、孫弟子にあたるさの）は、自らの活動を「切支丹」と呼んだ。彼女たちが、既存秩序を転覆させる「切支丹」に自己同一化した点は注目される。同事件は、キリシタン禁制政策が、もはやキリシタンではなく、現行秩序から逸脱する事物を弾圧し始めたこと、また近代への移行期において、現実の社会に失望し、そこからの離脱によって、幸福になろうとする宗教運動が現れ始めたことを示していた。

「第五章　信仰共同体と生活共同体」では、第三・四章で見た、イメージと現実の乖離とは別の理由で、潜伏キリシタンが存続できた点を解説する。まずは、コンフラリア（中世ヨーロッパ起源の平信徒組織）が禁教政策のもと、宗教活動を維持したことが挙げられる。これは浦上と天草を例にした説明であるが、同地域では、生活共同体としての村社会も、重要な役割を果たした。村社会は、長崎代官に対する「御救」（極貧者や被災者などへの生活保護）の申請等を通して、村民の生活を支えた。いわばセーフティネットである。しかし、そうした機能は、「切支丹」の存在が露見すれば、停止してしまう。それゆえ島原藩や長崎奉行、そして庄屋による「異宗」・「異法」の探索、吟味に対し、村社会は結束して抵抗した。コンフラリアと村社会、これら二つが同時に上手く機能している限り、キリシタンは潜伏状態を維持できたのである。だが後者では一八世紀以降、商品経済の展開で格差が拡大し、すべての百姓が平等な立場で村の自治に参加できなくなった。このことが、潜伏キリシタンの信仰にも大きな影響を与えていく。

「第六章　重層する属性と秩序意識」では、「浦上一番崩れ」を素材に、潜伏キリシタンが存続できた理由に関して、農民への「仁政」を標榜する幕藩領主の存在が、新たに指摘される。表面的とはいえ、この「仁政」を頼りに生きる潜伏キリシタンを、幕藩領主は「切支丹」と見なすことができなかった。ところが、幕末維新期に起きた「浦上四番崩れ」では、様相が変わった。「四番崩れ」の契機は、大浦天主堂の落成と、そこにカトリック宣教師が訪れたことであった。これを受けて潜伏キリシタンは、それまで秘匿していた信仰を表明するようになる。彼らは、幕府の厳しい取調べにも屈しなかった。禁制を受け継いだ維新政府の下でも、棄教を受け入れない村民約三千人が配流され、少なくない数の殉教者を出した。なぜこうしたことが起こったのか。重要な手がかりは、彼らへの吟味の過程で明らかになった、来世救済願望である。そしてこの願望には、前章でも見た一八世紀以来の格差

社会が、長崎開港（一八五九年）以来の物価騰貴によって、加速した点が関係していた。そのため慶応期（一八六五年から六八年）になると、キリシタンは、セーフティネットが機能しない村社会にではなく、来世での救済に期待するようになり、それが殉教覚悟の信仰表明につながった。これらの事柄は、やはり「近代への移行」という文脈で理解できる。「潜伏」から「表明」への変化は、既存秩序に幻滅した諸宗教の出現の一環であった。その後、明治も十年代に入り、国家によるキリシタン規制が事実上終わったにもかかわらず、今度は地域社会において、キリシタンへの規制が展開していく。

「終章　宗教は解放されたか」では、これまでの考察を踏まえて、近世から近代への移り変わりが、宗教を軸として論じられる。前述のとおり、潜伏キリシタンが、檀那寺の活動やその他の宗教活動に関わることは、珍しいことではなかった。それどころか、複数の宗教活動への参加は、近世人全般にあてはまることであった。つまり近世人の宗教活動は、現代人が考えるよりも多種多様で、その境界も曖昧であった。一方で、明治十年代に起こったキリシタン規制を見ても分かるように、近代に自由が認められたからといって、宗教の解放や、多様性の確保が実現されたとは、必ずしもいえない。幕末に誕生した新宗教は、しばしば政府に弾圧された。諸宗教による国家神道へのすり寄りも見られた。宗教に関する状況を検討すれば、「多様・曖昧の近世から、一律・統制の近代へ」という図式さえ、浮かび上がるのである。こうした図式は、近代的価値観の見直しを、現代人に促している。

ここまで、本書の概要を紹介してきた。冒頭でも触れたように、西洋史の研究者が、本書の日本史研究における意義について、軽々しく意見を述べることは、慎まねばならない。ゆえに、本書が一般向けに書かれた学術書である点を念頭に、西洋史、とりわけ評者が専門とする近代フランス史との比較を織り交ぜながら、評を述べていきたい。

まずは、本書の魅力的な文体が目を引いた。序章の冒頭では、国民的アニメの映画版を題材に、親しみの持てる話題から話が始まる。そこから、現代において宗教史を研究する意味や近世から近代への転換など、歴史学全般にとって重要な論題が提示される。その際、日本史だけでなく、西洋史にも言及が見られた点に感銘を受けた。キリスト教が主題である以上、当然のことなのかもしれないが、こうした目配りは幅広い関心を呼ぶことであろう。ここでは序章のみを取り上げたが、分かりやすい文体は、本書全体にあてはまる特長である。先に引用した書籍の中で、仏教学の大碩学である中村元は、次のように述べていたそうである。「分かりやすく説くのは通俗的で、わけの分からぬような仕方で説くのが学術的であるかのように思われているが、これはまちがいだ。分かりやすく説くのが学術的なのだ[3]」。

次に注目されるのは、第二章から第五章で展開された複眼的・重層的視角である。特定の事象が生じた際、その原因を単一の事柄に帰すのではなく、複数の背景との関連性において捉える姿勢。具体的には、潜伏キリシタンが存続できた理由について、キリシタンとしての活動のみに目を向けるのではなく、様々な異端的宗教活動という枠組みの中で理解した点。複数の属性を併せ持った

（農業や漁業、商業、工業、日雇いなどの様々な生業に従事し、同時に村請制の下に編制された村落に帰属する）存在として、キリシタンを検討した点。本書の最大の長所は、これらの取り組みにあるだろう。評者はフランス革命期の宗教社会史を研究しているが、同時期には革命派とカトリックが激しく対立した。しかし、カトリック教徒もまたフランス共和国の市民であった。パリならパリ、リヨンならリヨンなど、自らが所属するコミュニティーの住民でもあった。そして職業は言うに及ばず、クラブやサロンなど、様々な社会的結合にも属していた。本書の読解を通して、こうした複眼的・重層的視角を意識せずして、歴史的実像には近づけないことを再確認した。時代は下るものの、一九世紀後半のフランコ・ジュダイスム（ユダヤ系フランス人がフランスを祖国とみなし、フランス的価値とユダヤ的価値を一体のものと捉えること）を例にとっても、同じ認識に至るはずである。さらに言えば、現代世界を考える上でも、こうした視角は重要になるだろう。村社会のセーフティネットが機能不全に陥った結果、潜伏キリシタンが死を覚悟の上で信仰表明したとの指摘は、欧州での生活に失望したイスラム教徒が中東地域に渡り、過激派組織に合流する昨今の状況との関連性を、評者に想起させた。

最後に、第六章から終章で提示された「多様・曖昧の近世から、一律・統制の近代へ」という図式であるが、これも西洋史との比較が可能かもしれない。近代フランスでは、宗教的自由が法律で宣言されても、その自由を逆手にとり、カトリックが礼拝活動を通して、少数派のプロテスタントやユダヤ教を弾圧する危険があった。つまり、宗教的な多様性が損なわれる恐れがあった。それゆえ、ナポレオン帝政以降の一九世紀フランス国家は、主要な宗教宗派（カトリック・プロテスタント・ユダヤ）を公認し、金銭面を含めて保護すると同時に、宗派対立が起きないよう統制を加えた。「多様性を確保するための統制」といえよう。他の欧州諸国の事例も検証しなければ、確かなことはいえないが、洋の東西を横断して、この図式を検証すれば、興味深い知見が見出せるのではないだろうか。

このように、本書は多くの長所を持ち、高い完成度を誇っている。だが、この世に完璧な研究など存在しないし、存在すると断言する者がいるなら、その者は研究者ではない。評者のような門外漢にも、もう少し本書から教わりたいと思う点があった。的外れである可能性は高いし、適切であったとしても「ないものねだり」に近いのだが、いくつか述べてみたい。

最初に気付いたことは、島原天草一揆以降の、キリシタン禁制を巡る地域差である。確かに、禁制は幕府の指導による国家的政策であった。しかし、実際には幕府領の浦上をはじめ、諸藩や諸地域の間には、キリシタン禁制のあり方に微妙な差異が見られたのではないだろうか。個々の藩の事情については研究の蓄積があるはずだが、例えば踏絵に注目した場合、小倉藩では「上踏み」・「下踏み」といって、身分（大庄屋から平百姓に至るまで）によって踏絵の順番が定められた。また、年貢を早く収めた者は、踏絵を免除される「抜け踏みの制」があった[4]。本書が強調する格差社会とキリシタン信仰の結びつきを考える上で、示唆に富むと思われる。このような地域差の有無が説明されていたならば、浦上で起こった「崩れ」の背景と展開が、より鮮明になったのでは、

と評者は考える。

続いて、「浦上四番崩れ」に影響を与えた格差社会である。格差社会の到来で、村社会のセーフティネットが弱体化し、その結果、キリシタンが来世救済信仰に傾倒した。評者は、本書のこうした指摘に賛同する。ただ、そうした結論に至るまでに、検討せねばならない項目が、いくつか存在するのではないだろうか。第一に、格差社会が村主導の宗教行事に与えた影響である。村の内部で、上層と下層の格差が拡大したとするならば、分裂した村民が行う宗教行事には、何の変化も生じなかったのか。近代フランス史でも、宗教行事や祭りの研究は盛んであるが、これらの行事が共同体を結束させたのか、それとも日常の不満を爆発させたのか、諸説ある。また、聖体行列に居合わせたプロテスタントを迫害するカトリックのように、異端の存在が、宗教行事の効力を損なわせると見なす宗派もあった。ヨーロッパ史の事例が参考になるかどうかは分からないが、格差が拡大する中、村全体で行う宗教行事にキリシタンが参加したことが、村社会の一体性にいかなる影響を与えたのか、知りたいと思った。

第二に、キリシタンの戒律と当時の社会の関連である。「浦上四番崩れ」の背景を理解するには、周囲の環境の変化と、戒律の関係も検討した方が、よかったのではないだろうか。本書は、信仰心以外の面から、潜伏キリシタンの存続を考えているため、戒律に関する考察が少なくなるのは当然である。このことは評者も理解している。しかし、潜伏キリシタンは日常生活、および人生の節目となる儀式において、間違いなくキリシタンの戒律を確認していただろう。たとえば、離婚の禁止、堕胎の禁止、人身売買の禁止、子供の同意のない縁組の禁止などである。[5] もちろん戒律は時代と共に変わっていた可能性がある。だが、それを踏まえても、潜伏キリシタンが格差社会の進行で、戒律との矛盾に直面するケースはなかっただろうか。経済的な苦境を背景に、離縁や堕胎、子供が望まない結婚、身売りが行われた可能性は、ゼロではなかったと思われる。そうしたことがあったとすれば、潜伏キリシタンの心には、罪の意識が宿ったことだろう。それが既存秩序への絶望を促し、殉教覚悟の信仰告白に至る一因になったと、評者は推測している。

以上、批判めいたことを書き連ねたが、門外漢が史料的な事情や、これまでの研究蓄積をよく知らないまま述べた事柄である。著者ご本人や、読者からの叱正があった時は、自分の不明を恥じる他ない。けれども、繰り返しになるが、評者が西洋史の書籍ではなく、あえて日本史の書籍に着目したのには、理由がある。本書が、宗教とのつながりを意識せずにはおれない現代において、専門の枠を越え、広く読まれる価値を有すると考えたからである。したがって、評者の指摘が、仮にいくらか妥当性を持ったところで、本書の値打ちが下がることは少しもない。優れた書籍が、視野を広げてくれたことに心から感謝しつつ、この書評を終えることにしたい。

① 植木雅俊『仏教学者　中村元――求道のことばと思想』角川選書、二〇一四年、一一一-一一二頁。

② 本書の一九頁にも記されているが、この書評では、キリシタンの実際の宗教活動と、その信者について述べる場合、カタカナの「キリシタン」を呼称として用いる。これに対し、禁教下において、キリシタ

ンの実態から乖離した虚像としてのそれを呼称する際は、法令等に見られる史料用語の「切支丹」を用いる。

③ 植木、前掲書、一九三頁。

④ 豊津町史編纂委員会編『豊津町史』上巻、一九九八年、八四九－八五二頁。

⑤ 狭間芳樹「近世日本のキリシタン信仰と救贖思想」『アジア・キリスト教・多元性』第七号、二〇〇九年、二八頁。

（東京理科大学講師）

（四六版　二五六頁　二〇一四年五月　講談社　税別　一六五〇円）

会　告

二〇一四年度史学研究会大会および総会は、予定どおり一一月二日（日）午後一時より京都大学文学部第三講義室にて開催されました。

公開講演は、小島道裕、川島昭夫の両氏により左記の演題で行われ、盛会裡に終わりました。

洛中洛外図屏風をめぐるいくつかの論点
——中世から近世へ——　小島　道裕氏

海の植物園
——セント・ヘレナ、モーリシャス、マドラス——　川島　昭夫氏

なお、大会と総会に先立って開催された定例の理事会・評議員会において、二〇一四年度会務報告がなされました。